

23 今川義元の支配を退けた人々

～自治都市見付と一の谷墳墓群～

1 茶畑からの発見

今から25年ほど前、JR磐田駅から北に2kmほどにある一の谷（現水堀地区）で約3,000基の墳墓が発見された。そのうち目をひくのは約1,600基ほどの集石墓〈写真1〉で13世紀末～16世



〈写真1〉一の谷遺跡の集石墓

紀前半までのものだと推定される。

礫が丘の斜面をおおった光景は「賽の河原」のようであった。その後、一の谷遺跡は保存運動が起こったものの、宅地化のため、取り除かれる。この遺跡の東南に見付の町があり、江戸時代には江戸から29番目の宿場町として栄えた。しかし、見付の都市としての発展はそれ以前からあり、ちょうど集石墓がつけられた頃と重なる。

見付は古代、国府が置かれ、中世には守護所が置かれた行政の中心であった。13世紀後半、京都の阿仏尼が荘園の訴訟にでかけた紀行文『十六夜日記』は見付の様子を「里荒れて物おそろし」と書き、町は一時衰退したと考えられる。ところが、それを境に見付の町の発展が始まる。

それを支えたのが、東海道の陸上交通と南にある「今の浦の湊」である。今は町の南に小さな川筋としてわずかに面影をとどめる。かつて、今の浦は、見付の町を流れる中川に直結する入り江であった。江戸時代には船を所有する見付の商人が、このルートで遠州灘の福田湊に物資を運んだ記録もある。

こうした交通の要衝に位置した見付の町は、宋銭の流入に伴う貨幣経済の発展とともに繁栄する。発展のもう一つの理由は、特に14世紀後半以降、強力な守護による支配がなかったという点である。この時期の守護である斯波氏は、尾張・越前の守護も兼任していた。代わりに置かれた守護代甲斐氏も越前の守護代と遠江を兼任、越前国をその基盤にしていたため、支配は弱かった。

そのため、遠江国の飯尾氏や勝間田氏・井伊氏・天野氏などの国人が地域で力を持つようになる。こうした間隙をぬい、町人たちは見付を自治都市という権力を排除した町として発展させる。16世紀、戦国時代の初めにつくられた狂言の脚本『磁石』には「あの宿は長い長い宿じゃ」という会話がある。このころ見付は、守護の城下町という政治的な都市から商業都市へと変貌し、自治都市としての機能も整える。

2 祇園社の祭り「舞車」

16世紀半ば、駿河国を中心に強大な力をもった戦国大名今川義元が遠江国の国人を破り支配の手を広げ、その波は自治都市見付にも押し寄せた。1541（天文10）年5月、義元は代官堀越氏を派遣し、100貫文の税を負担させ、見付の自治を崩そうとしたのである。

それに対して見付の人々は周辺の百姓を巻きこみ、次の要求をする。それは、義元に年貢100貫文を要求されたが、それを150貫文に値上げしてもよい、その代わり代官支配を停止し、町の行政は自分たちに任せてほしいという内容であった。義元にも内部分裂というお家事情があり、この要求は認められた〈史料1〉。

見付の町の自治を担った人々は、別の史料から町の代表者12人だったとみられる。重要な事柄はさらに人を加え、40人が寄り合いかたちで決定していた。他の自治都市の堺で36人の「会合衆」、博多で12人の「年行司」が町政を指導していたのと類似する。さらに自治の要となったのが、見付を鎮守する惣社（淡海国玉神社）の神官大久保氏であった。

自治都市見付の団結のシンボルは、今も初秋に行われる見付天神の「裸祭り」で、14世紀初め、鎌倉末期から綿々と受け継がれてきたとされる。祭りのクライマックスは、御輿が天神から惣社に入るところである。惣社は、見付にある見付天神（矢奈比売神社）やそれより南にある祇園社（天御子社）を傘下におさめていた。

また、今は行われませんが、江戸時代初期まであった祇園社の夏祭りも、見付町人の祭りだったと考えられる。祭りは町の東西から

上下の旅人を山車に乗せ、舞いをまわすもので、能楽の脚本である「謡曲」にも登場し、「舞車」といわれる。見付町人衆は「舞車」と「裸祭り」という、夏と秋の祭りをとおして、結束力を固めていった。

〔史料1〕
 遠江国見付府之事、右、本年貢百貫文ニ相定之処、以三五十貫文之増分、百姓職事訴訟申之間、停止代官一円領掌畢者、毎年百五十貫文可納所、若於無沙汰者、則可令改易之者也、仍如件、
 天文十
 五月五日
 見付府
 町人百姓
 〔静岡県史〕資料編7中世三
 526頁

3 町を焼く見付町人たち

今川義元の支配を退けるほどの力を持った見付に「くさび」を打ったのが、遠江国の新たな支配者になった徳川家康である。家康は見付の自治を保障しつつも、今川氏とは異なる支配方針を徹底する。それは、1569（永禄12）年、見付の有力商人と思われる秤座の12人に特権を認め、代わりに軍役を課したことである。見付町人は、家康移動の際の物資の運搬と警備を負担することになった。家康にとって、駿河国をおさめた武田にうち勝つために、彼らの交通力を軍事的に利用するのは、うってつけの策だったのだろう。1572（元亀3）年には、遠江をねらう信玄軍が見付を攻略した。この時、家康の命令で町人たちが見付の町の一部を焼き、信玄に報復している。こうした家康のたくみな政策で、見付の自治は次第に骨抜きにされていった。

秀吉の天下統一が行われるなか、関東に移った家康は16世紀後半、見付の2km南方の中泉に代官を設置し、見付一帯の支配をゆだねたため、自治は事実上崩壊した。そして、見付の自治を担った有力町人の墓と思われる一の谷墳墓群も、それと時をおなじくして終焉に向かう。石に覆われた墳墓群はその後忘れ去られ、雑木林となり300年の眠りについたのである。

〈参考文献〉

義江彰夫「国府から宿町へ」（『中世都市と一の谷中世墳墓群』名著出版）
 一の谷遺跡を考える会編『見付の町に一の谷があった』